

土木地質に活躍する地質技術者

| | |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-07-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桐谷, 文雄 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/00005773 |

土木地質に活躍する地質技術者

桐 谷 文 雄^{*}

最近各大学の地学科あるいは地質学科の卒業生で土木地質方面の調査会社、研究所、事業所などに就職するものが増えてきていることは地質技術者の活躍する分野が拡がりつつあることを示すもので、誠によろこばしいことである。

現在土木地質にたずさわっている地質技術者にはダム、トンネル、道路、地沁り等の専門別に夫々の技術者がおることは当然であるがこれらの人々はその所属機関、機構、業務上いくつかの異ったグループに分けられる。例えば電発の如きダム、発電所も自ら建設する機関においては各地質技術者は原則として各河川別に調査、研究を担当しており調査の初期の段階から建設、保守の段階まで一貫してあらゆる調査業務を行なうことがたてまえとなっている。

従って主要業務であるダム、水路、発電所等の基礎地質の土木地質的調査ばかりでなく時には補償問題にからんで鉱床、鉱山の調査やその評価、湛水後の貯水池周辺の地沁り調査、ダム建設に関連する河川の濁水原因の調査、ダム完成後の下流の水位低下に伴う種々の問題の調査研究等あらゆる地質的問題にタッチしている。このために基礎的、研究的な問題が沢山にあっても仲々それらに取組む余裕がないという悩みが多分にあることは否めない。

又調査研究機関に所属する人々は具体的な現場の問題よりもむしろ現場からピックアップされた基礎的問題や特殊の問題に長い時間をかけて取組み現場はその研究結果の一つの実験場として取扱われ現場の問題に終始一貫してタッチする機会が少ない立場にある。

更に一般の土木地質のコンサルタント的な機関（例えば土木調査会社の如き）に所属する人々は現場の依頼に基づいて現場の問題に取組むが、依頼された問題の解決だけに取組むのであって、その結果がどの様に受入れられ、それによってどんな処置がとられたかなどの問題発生前後の状況については殆んどタッチし得ない立場にあるといえる。

最後に各大学の地学教室は夫々の地方における唯一の地質調査研究機関であるところから、各県などが独自で行なうダム、道路、トンネル、地沁り対策などの計画に従って土木地質的調査を委託されて実施することが多い。この様な立場の人々は土木地質に非常に興味をもってそれらの調査研究に従事するが元来が教育研究機関であり原則として種々の土木地質的調査研究のみに時間をさくことは不可能である。しかしこれらの人々の調査に対する考え方や調査方法などは極めて理論的であり純地質学的で所謂オーソドックスな考え方、調査のやり方が多い。

この様な点はとかく純地質学から離れ勝ちな前3者の立場にある土木地質技術者にとってはたしかに一つの教訓でもある。

* 静岡大学理学部地学教室

これからの土木地質は以上のいろんな立場にある土木地質技術者が互いに忌憚なく意見の交換を行ないながら前進することがその発展を促す鍵となるものと考えます。

日本応用地質学会の種々の集会の席はその最も良い場であるといえる。日本応用地質学会の前身であった災害地質研究会創立当時の一員としてあえて一言した次第である。